



TITLE:

アダム・スミスの學説に關して福田博士の教を乞ふ(一)

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

---

CITATION:

谷口, 吉彦. アダム・スミスの學説に關して福田博士の教を乞ふ(一). 經濟論叢 1924, 18(5): 961-980

ISSUE DATE:

1924-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128162>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 五 號      第 十 八 卷

大正三十三年五月一日發行

## 論 叢

投資と租税……………法學博士 神戸 正雄

フオンウイゼの社會學論……………文學博士 米田庄太郎

水戸藩常平倉の成立……………經濟學博士 本庄榮治郎

海運同盟に對する英吉利の態度……………法學士 小島昌太郎

## 時 論

自作農地創定施設要項を評す……………法學博士 河田 嗣郎

## 說 苑

スミスの學說に關して福田博士の教を乞ふ……………經濟學士 谷口 吉彦

マルクスの勞賃論……………經濟學士 森 耕二郎

## 雜 錄

スミスの植民地觀の由來と地位……………經濟學士 長田 三郎

## 說苑

### アダム・スミスの學說に關して

### 福田博士の教を乞ふ (二)

谷 口 吉 彦

- 目次——一、緒言 二、スミスと資本主義經濟學 三、スミスと重商主義 四、スミスと價格經濟組織(以上本號掲載)  
五、スミスの道德哲學 六、「諸國民の富」の第五卷に就て 七、スミスの倫理學說 八、「厚生哲學」及び「第三帝國」に就て  
九、結論

#### 一

アダム・スミスの生誕二百年を記念するために、彼れの學說に關する多數の勞作が、吾學界に提供せられたことは、私共後學にとつてどれ程仕合せなことであつたらうか。中に就き福田博士が最近發表せられた所の『厚生哲學の闘士としてのアダム・スミス』と題する論文は、是等多數の勞作中最も特色あるもの、一であらう。私の常に尊敬する經濟學者の一人であり、また吾が經濟學界に於ける最高權威の一人である博士の論文に對し、私は特殊の興味を有つて精讀した。博士

說苑

アダム・スミスの學說に關して福田博士の教を乞ふ 第十八卷 (第五號 九九) 九六一

の捉へられた問題は、スミスに於ける經濟學と倫理學とを如何に結合すべきか、即ち經濟生活と倫理生活とが如何に調和さるべきかの問題であつて、其は必ずしも新らしいものではない。私の寡聞にして誤りなければ、それはスミスの死後まもなく、彼の友人 ステュアートに依つて提供せられ、其後多くの學者の頭を悩ました問題である。吾國では既に大正七年藤井健次郎博士に依つて之に關する有益な論文が發表せられ、(註) 這回の機會にも亦長谷田泰三氏が同一の問題を主題として取扱つて居られる。然るに福田博士の研究は、是等の同じ問題に關する諸論の中、特に著しき特徴を有するものであつて、私は今更の如く博士の着眼に敬服せざるを得ない。併し乍ら同時にまた私は、博士の所論に對して多くの疑問の湧き出づるを禁じ得なかつた。『學問は鬭争であり……眞理は鬭争の間に見出さるゝ』<sup>4)</sup>といふ博士の言葉に煽動されて、螻蛄の斧を揮はんとする程私は自惚れて居ない。けれども既に疑を有して質さるゝは學に忠實な所以でもなく、博士を尊敬する所以でもない。敢て博士の教を仰ぐ次第である。

(註) 此の論文は大正七年四月十四日東京帝國大學文科大學哲學會の春季公開講演に於て、藤井博士が發表せられたもの、筆記である。當時東京に居た私は、此の講演に侍して、アダム・スミスの名を深く印象したのであつたが、それから滿六年を経過した今日、博士の論文を新たに讀みかへして、今昔の感慨に堪えぬものがある。

福田博士の主張に依れば、スミスは、今日普通<sup>2)</sup>に言はるゝ如く資本主義經濟學者でもなく、又利己主義經濟學者でもなく、彼の經濟學に於て主張する所は、經濟生活の自然法則觀である。又彼れは道德感情論者でもなく、同情論者でもなく、彼の倫理學に於て提唱する所は、倫理生

- 2) 『アダム・スミスの根本思想に就て』哲學雜誌第三十三卷第三百七十七號 (大正七年七月一日發行)。
- 3) 『アダム・スミスと利己心』經濟學論集第二卷第一號。
- 4) 商學研究、前掲號、三九〇頁。

活の理性法則觀である。さうして此の經濟生活と倫理生活とが調和し統一せらるゝ所のものは國家生活であり、此の國家生活に於ける統制原理は國民の幸福であると主張する。従つてスミスの學説は、正しく博士の唱道さるゝ厚生哲學と一致するものであり、彼れは厚生哲學の闘士として生涯奮闘を續けたものだと言ふにある。果して然らば、博士は茲にスミスに於て其の有力なる同志を發見された譯であり、他方から言へば、博士はスミスの再現でもある。併し乍ら事實は果してさうであらうか？ 私は之について少からざる疑を有つ。以下私は順次それについて教を乞ふであらう。疑問の順序は必ずしも博士が論述の序を追つたものでもなく、又理論構成上の順序を追つたものでもない。一に私の便宜に従つて排列したものである。

## 二

私は先づスミスと資本主義經濟學との問題に就て博士の教を仰ぎたい。博士によれば、『アダム・スミスは今日所謂資本主義の經濟學に對しては屢々抗爭して居る』ものであり、且つ又彼れは或る意味に於ける軍國主義者であるから、其の理由に依つて彼れは資本主義經濟學の代表者でないと言はるゝ。私は第一に、福田博士の言はるゝ資本主義經濟學とは何を意味するか、又それと軍國主義との間に如何なる關係ありと認めらるゝかに就き、博士の教を受けたい。河上博士に従へば、資本主義經濟學とは、第一に『資本主義の經濟組織の下に於ける各個人の利己的活動の是認』を以つて其の根本主張の一となし、第二に其の必然の結果として、資本主義の經濟組織の下

5) 商學研究、前掲號、三九二頁。

6) 同上、四〇三頁。

7) 河上博士著、資本主義經濟學の史的發展、一三六頁。

に於ける自由放任政策の主張を他の根本的特徴となすものである。さうしてそれが資本主義經濟學と謂はるゝのは、其の結論に於て『資本主義の永遠性の主張』<sup>8)</sup>を産み出して居るからであるが、もし斯學を以て此の如く觀念する場合には、それは軍國主義若くは國家主義とは概念上全く別種の範疇に屬する。換言せば軍國主義者であると言ふことは、資本主義者であることをも社會主義者であることをも意味し得ない様に思はれる。然るに博士は、資本主義と軍國主義とが恰も兩立すべからざる反對概念なるかの如く考へられ、スミスが『國防の必要を説き』<sup>9)</sup>『軍隊の必要なることを主張する』<sup>10)</sup>事實を以て、『彼れが資本主義經濟學の樹立者でないといふことを最も有力に證據立てる』<sup>11)</sup>とせられ、彼れは『資本主義的では無くして寧ろ軍國主義的である』<sup>12)</sup>と言はるゝ。私の見る所に依れば、資本主義と軍國主義とは概念の範疇を異にするから、スミスが軍國主義者であることが事實であつたにしても、その事は抽象的には彼れの資本主義者であるか否かを示すものでは無いと思ふが、併し實際には、資本主義の經濟組織の下に於て資本家の目的とする資本の蓄積を遂行する爲めには、常に他の社會組織又は他の階級と接觸することを要し、従つて資本主義の發展する途中には、常に他の社會又は他の階級に對する壓制手段を必要とするから、資本主義は實際に於て軍國主義若くは國家主義を伴ひ易い傾向を有する。<sup>13)</sup>私は此の點に就き、ブデンの言ふ所を左に引用するであらう。

『資本主義そのものが平和的であるといふ結論は、資本主義がその性質上好戰的であるといふ反對の結論の誤りであると同じく、誤謬である。……それ故に吾々の結論は、資本主義は平和

8) 同上、一七四頁。

9) 河上博士著、社會問題研究、第四十五冊、一二頁(通册一五九二頁)。

10) 商學研究、前掲號、四〇三頁。

11) 同上、四〇三頁。

12) 同上、四〇三頁。

13) 同上、四〇六頁。

14) Rosa Luxemburg, Die Akkumulation des Kapitals, 32 Kapitel: Der Militarismus als Gebiet der Kapitalakkumulation (SS. 431-446).

15) Louis B. Boudin, Socialism and War (1916).

的でもなく好戰的でもないが、唯其の發展の階段を異にするに従つて、或は平和的の、或は好戰的の傾向を採るに過ぎないといふことである。

『資本主義的社會の生涯をば、此の目的に従つて分割するならば、三期とすることが出来る。

……其の若き時代にあつては、資本主義は戰鬪的である。それが少年から成人に成育するには、數多の戰爭を伴ふが、……一たん成人に達した後は、資本主義は平和的となつて来る。

……然るに資本主義が——此の語を解して自由競争の原則に立脚せる社會であるとするならば——其の全盛期を經過して、下り坂になつて來ると、恐ろしく痼癥を起して、其の初期の好戰的傾向に復へる』<sup>16)</sup>と。

かくの如く資本主義其のものは軍國的でもなく平和的でもなく、唯其の發展の階段に於て軍國主義と結び付くべき多くの機會を有するものとすれば、スミスが果して博士の言はるゝ様な軍國主義者であつたとしても、此の事は、『彼れが資本主義經濟學の樹立者でないといふことを最も有力に證據立てる』<sup>17)</sup>ものであるとは思はれない。東西古今の史實に通曉せらるゝ福田博士が、資本主義と帝國主義若くは軍國主義とが如何に相結んで進み來つたかを看過さるゝ筈はない。私は之を不思議に思ふ。

唯茲に博士の謂はるゝ資本主義若くは資本主義經濟學が、今日普通に言はるゝそれとは別種のものではないかの疑が起る。さうして然る限りに於ては、スミスは資本主義經濟學の創設者ではあり得ないかも知れぬ。且つ又資本主義を如何に觀念しようともそれは論者の自由であり、たゞ

16) Louis B. Boudin, *ibid.*, pp. 48—49.

17) 福田博士、商學研究、前掲號、四〇三頁。

見解の相違に過ぎない問題ではあるが、併しさうなると、博士の否定論は、『世の中に行はれて居る』<sup>18)</sup>所の『スミスは資本主義經濟學者である』<sup>19)</sup>との説に對しては、全く無意味のものとなつて了ふであらう。

次に博士がスミスの資本主義經濟學者なることを否定せらるゝ有力な第二の論據として、『國富論』にもなければ道德感情論の中にもなくて、他人の編纂したグラスゴー大學の講義筆記の中にある』<sup>20)</sup>と繰返し述べられる所のものは、スミスが『商業的精神、近頃の言葉で言へば capitalistic spirit 資本主義的精神から生ずる不便な點』<sup>21)</sup>を列舉して居るといふ事實である。私は先づスミスの列舉した三個の不便 (inconveniences) が、商業的精神若くは資本主義的精神から生ずる缺陷であるかどうか、又スミスが事實左様に解して居たかどうかを吟味して見たい。謂ふ所の不便とは、『第一に商業的精神といふものは人の見識を狭くしてしまふ』<sup>22)</sup>『第二に商業的精神がはやるといふと國の教育といふものが蔑ろにされる』<sup>23)</sup>『第三に『商業の他の思しき結果は人間の勇氣を挫く……軍事的精神を消滅せしむる』<sup>24)</sup>といふ點であるが、然らば何故に商業的精神は是等の缺陷を齎らすのであらうか？ それは言ふ迄もなく分業が行はれる結果、人間の生活が一小局部に限定されてしまふからである。然らばそれは『商業的精神から生ずる不便』<sup>25)</sup>ではなく、分業から生ずる不便ではなからうか？ 成る程スミス自身も arising from a commercial spirit といふ文字を使つては居るが、併し彼れの眞意が其處になかつたことは明らかである。彼れは第一に『それが人々の見解を狭くする』<sup>26)</sup>理由を述べて、『分業が完全に進んだ所では、あらゆる人間は一の單純

18) 福田博士、商學研究、前掲號、三九二頁。

20) 同上、四〇三—四〇四頁。

22) 同上、四〇五頁。

24) 同上、四〇六頁。

26) Lectures, p. 255.

19) 同上、三九二頁。

21) 同上、四〇四頁。

23) 同上、四〇五頁。

25) 同上、四〇五頁。

27) ibid., p. 255.



なる作業のみを爲さねばならぬ』<sup>28)</sup>からと言ひ、第二に『教育が大變忽かにされる』<sup>29)</sup>のは、『分業が總ての職業を極めて單純な作業に化してしまふから、極めて幼少な子供を使用する機會を與へる』<sup>30)</sup>からだと言ひ、第三に『それが人間の勇氣を挫き軍事的精神を消滅せしめる』<sup>31)</sup>のは、『分業が總ての商業に於て無限に行はれるから、あらゆる人間の考へが一定の事柄に關してのみ働く』<sup>32)</sup>からであると言ふ。是に由りて觀れば、スミスの言はんとする所も亦、是等の『不便』が總て直接に分業から生ずるといふにあつたことは明らかである。而してスミスが更に思索を進めた所の、『諸國民の富』に於ては、是等の事柄は明らかに分業の弊害として述べられて居る。今分業の結果として如何に人間の精神能力が沮害せられ、其人の見解が狹められるかに就き、『諸國民の富』に謂ふ所を引用して一例を示すならば、

『分業の進むに従つて、勞働によつて生活する人々即ち大多數の人々の仕事は、極めて單純な一二の作業に限られて来る。然るに大多數の人々の理解力は、彼等の日常の仕事によつて形成されるものであるから、其人の全生活が一二の單純な作業を爲すために費され、また其仕事の結果が恐らくは常に殆んど又は全く同様である所の人々は、彼れの理解力を働かせる機會を有たない……従つて彼れは自然にかゝる理解力を働かす習慣を失ひ、さうして一般に馬鹿となり無智となつて来る。

『彼れの精神の鈍感なことが、彼をして理論的な會話を味つたり之に喩を容れたりすることを不可能ならしめるのみならず、寛大な、高尚な、優しい感情を懷くことが出来なくなる。その結

28) ibid., p. 255.  
29) ibid., p. 256.  
30) ibid., p. 257.  
31) ibid., p. 257.  
32) ibid., p. 257.

果として、私的生活の日常の義務に關する多くの事柄に就ては、彼れは全く判斷することが出来ない。

『彼れの國家の利害といふ様な大きな廣い事柄に就ては、彼れは全然判斷することが出来ない。さうして極めて特別な訓練をなすでなければ、戰時に於て彼れの國家を防衛することは等しく不可能である。彼れの固定的な生活の不變なることが、自然に彼れの精神の勇氣を挫き、さうして彼をして……冒險的な兵士の生活を嫌忌せしめる。かくの如くして彼れ自身の特定の職業に於ける熟達は、彼れの精神的、社會的、及び軍事的能力を喪ふことによつて獲得される様に見える。……』

『彼等は教育のために割くべき時間を殆んど持たぬ。彼等の両親は、幼少な彼等を養ふことさへ出來かねるから、彼等は働くことが出來るやうになると、直ちに自分の生活資料を儲け得る何かの職業に就かねばならぬ』<sup>33)</sup>と言ふ。

尙ほ是等の事は『諸國民の富』の他の個所に於ても繰返し述ぶる所であるが、<sup>34)</sup>今はこれ以上引用するを要しない。博士が『それは不幸にして Wealth of Nations にはない。又 Moral Sentiments にもない。併し Lectures in the University of Glasgow にあるのであります』<sup>35)</sup>と言はるゝ是等の事柄が、幸か不幸か Wealth of Nations に於て、此の如く明瞭に述べられてゐる。

然らば此の如くスミスが分業の弊害を認めた事實は、果して博士の謂はるゝ様に、彼れの資本主義經濟學者にあらざるこの證據となり得るかどうか？ 私は此點にも亦疑問なきを得ない。

33) Wealth of Nations, Bk. V, Ch. I, PT. III, Art. II. (Cannan's ed. Vol. II, pp. 267—269).

34) 例へば、同上、Vol. I, pp. 128—129. Vol. II, p. 192.

35) 商學研究、前掲號、四〇六頁。

元來スミスが此の如く分業の弊害を論じたのは、言ふまでもなく分業を否定せん爲めの議論ではない。『是等の缺陷を救済せんとすることは、眞面目な注意に値する問題』<sup>36)</sup>であり、又その救済は事實可能であることを彼は信じた。否スミスの分業弊害論は、彼れが國民的普通教育を高唱し、また常備軍制度を主張せんための有力な論據となつて居るものである。今若しスミスが資本主義經濟の弱點を擧ぐるの故を以つて、彼れは資本主義經濟學者でないと言ひ得るならば、必ずしも右の分業弊害論を指摘するを要しない。より有效な多くの根據を列擧することが出来るであらう。併し乍ら私は、既に述ぶるが如く、資本主義經濟學者であるかどうかの問題は、さうした所に區別の標準があるものとは信じない。

尙ほ之に關聯して興味ある一の問題が残つて居る。それはスミスが分業から直接に生ずる弊害を捉へて、直ちにそれが『商業的精神』から生ずる弊害であると做し、更に博士が之に註釋して、それは『資本主義的精神』から生ずるものであるとせらるゝ點である。即ちスミスに於て分業は商業的精神と同視せられ、更に博士に於て分業は資本主義的精神と同視せられて居るのであつて、極めて不用意の間に現はれた此の些細なことが、私には甚だ興味あることの一として感ぜられる。元來スミスが研究の對象となしたものは、大體に於て資本主義經濟組織に屬するものであるが、スミスは此の組織を以つて長き期間に亘る歴史的發展の成果であると看做したにも拘らず、それが長き將來に亘つて歴史的發展を續けるであらうことを無意識に認め、社會組織の歴史的一形態を以つて其の一般的形態と看做すの傾向を有してゐたのである。さうして此の事は又大體に

於て資本主義經濟學者に共通の特徴をなすものであるが、此の如き立場に立つ時は、分業と商業とが離るべからざる觀念として現はれ來ることは極めて當然であらう。蓋し私の嘗て述べた様に、『分業に依る生産——富の社會的生産——は、それ自身に於て成立し得るものではない。』資本主義經濟にあつては、分業は個人的交換による賣買制即ち商業を前提としてのみ成立し得るものであつて、商業なくして分業はない。又分業の發達なくして商業の發達は期し難い。兩者は資本主義の經濟組織の下に於ては密接不可離の關係にあるから、そこで分業の發達から起る弊害を捉へて、直ちに商業の發達より起る不便であるといふスミスの不用意な言葉がある譯で、其はスミスとしては極めて當然のことである。然るに資本主義經濟組織を以つて一の歴史的形態に過ぎぬと觀る所の社會主義經濟學者にあつては、分業と商業とは必ずしも不可離のものであるとは考へない。『私的交換が分業を豫想することは正しいが、分業が私的交換を豫想するといふことは誤りである』<sup>37)</sup>とマルクスの謂つた様に、分業は必ずしも營利的商業を豫想しない。兩者が不可離の關係にあるは、單に一の歴史的形態に過ぎないと見るから、此の派の學者にあつては此の如き兩者の混同を生ずる謂れはないであらう。果して然らば、スミスが不用意の間に認めた所の分業と商業との同視は、却つて彼れが資本主義經濟學者であることを自ら裏書するものではなからうか？ さうして更に之を資本主義的精神と同視せられた福田博士も亦、同じ理由に依つて資本主義經濟學者の部類に屬せられるのではなからうか？ それは兎も角、福田博士は、『アダム・スミスが資本主義の代表者だの創立者だのいふ事はどこから出て來るのか、其妄なることは三頁か

37) 拙稿「スミスの價格論と分配論」(經濟論叢第十八卷第一號、一五二——一五三頁)。

38) Zur Kritik der Politischen Ökonomie, SS. 42—43.

四頁讀んで見ればすぐ解る事である』と謂はれて、以上の個所を指摘せられて居るが、私は必ずしも左様に考へないものであつて、それは却つてスミスの資本主義經濟學者であることを證明する一の證據となり得るものではなからうかと思ふ。

### 三

スミスが資本主義經濟學者にあらずして、厚生哲學の闘士であると博士の主張さるゝ第三の理由——と見らるべき點——は、『彼れが mercantile system を攻撃して居る』ことに關する。博士に従へば、スミスが『mercantile system に對して爲した攻撃は、今日の言葉を以つて云へば資本主義經濟に對する攻撃である。』何故かといふに、彼れの攻撃の要點は、『彼等 (mercantilists) は國の富を殖やす事を目的として、國民の welfare を國民の厚生を進めるといふ事は眼中におかない』といふ點にあるからである。私は先づスミスの重商主義攻撃の要點が、博士の言はるゝ所にあるかどうかを吟味したい。成程彼れが重商主義を論じた『諸國民の富』の第四卷の中、其の最初の章には、富に關する重商主義の誤解が攻撃されてある。彼等の主張——『富は貨幣若くは金銀に存する』——に對して彼れの主張する所は、『富は貨幣若くは金銀に在らずして、土地及び勞働の生産物に存する』ことにあつたから、此の點から見る時はスミスの攻撃は、博士の言はるゝ様に、彼等が國民の幸福を目的とせずして貨幣を目的とした點にあつた様にも思はれるが、併しスミスが貨幣の蓄積に反對した重なる理由は、それが人間の幸福と無關係であるといふ點よりも、寧ろ

39) 商學研究、前掲號、四〇六頁。

40) 同上、四二〇頁。

41) 同上、四二二頁。

42) 同上、四二二頁。

43) Wealth of Nations, Bk. IV, Ch. I, (Cannan's ed., Vol. I, p. 396).

44) ibid., p. 416.

貨幣の蓄積は實行不可能であるとの理由による。即ち『歐羅巴の總ての國民は、其の各々の國內に金銀を蓄積するために、出來得る限りの方法を講じたが、併し其の目的を達することは出來なかつた。』<sup>45)</sup>何故かと言ふに、彼れに従へば、一國に保有せらるゝ金銀の分量は、其國內に於て必要とする範圍に限らるゝのであつて、『若しも或國內に輸入さるゝ金銀の分量が有效需要を超過するならば、政府が如何に不躰番をしても其の輸出を防ぐことは出來ないし、……之に反して若し或る國に於て是等の分量が有效需要に不足するならば、……政府は其れを輸入することにつき何等の勢をも必要としないであらう。此の場合假令其の輸入を防がうとしても効果を舉ぐることは出來ないであらう。』<sup>46)</sup>『如何に残酷な法律』<sup>47)</sup>を設けても、『如何に苛酷な關稅法』<sup>48)</sup>を制定しても、一國の金銀を必要以上に蓄積し、若くは必要以下に減することは、到底不可能である。『それ故に何れの場合たるを問はず、國內に於ける貨幣の分量を保持し若くは増加せんための監視をなす位、政府の注意が不必要なことに用ひらるゝことは又とあり得ない』<sup>49)</sup>といふのがスミスの意見である。是に由りて明らかなる如く、彼れが重商主義に反對して金銀の蓄積を排斥する所以は、それが政府の力を以つてしては不可能であり、従つて此の如き政策は全く不必要であつて、一國貨幣の過不及は自由放任政策によつて完全に調節せらるゝことを主張する點にある。

スミスが重金政策に反對する第二の理由は、それが單に不可能にして不必要なるのみならず、國富の増進上有害であるといふ點にある。併し此の場合でも、金銀の蓄積が人間の幸福に有害であるからではなくて、其の爲めに採る所の政府の干涉政策が、富の生産の上に有害であるといふ

45) *Wealth of Nations*, Bk. IV, Ch. I, (Cannan's ed., Vol. I, p. 398).

46) *ibid.*, p. 402.

47) *ibid.*, p. 402.

48) *ibid.*, p. 403.

49) *ibid.*, p. 403.

點に證據を置いて居る。彼れは此の第四卷第一章の最後に述べて、『富が金銀より成るといふこと、並びに是等の金屬が鑛山を有せざる國に齎らされるのは貿易差額……に依つてのみ爲し得られるといふこと、此の二つの原理が打ち立てられると、國內消費のための外國貨物の輸入を出来るだけ少からしむること、國內産業の生産物の輸出を出来るだけ多からしむること、が、必然的に政治經濟の大目的となつて来る。従つて國を富ますための二つの大きな機械は、輸入の制限と輸出の獎勵であつた』<sup>50)</sup>と言ひ、第二章以下第七章に至る六章に於て、輸入制限に關する二問題と、輸出獎勵に關する四つの政策とを論究して居る。さうして是等の政策は、それが『年々の生産物の價值を増加するか、若くは減少する傾きあるに従つて、明らかに其の國の眞の富及び收入を増加し若くは減少する筈である』<sup>51)</sup>との見地から、『是等の各々が其國産業の年々の生産物の上に如何なる結果を齎したかを吟味せん』<sup>52)</sup>としたものである。之が吟味の結果は、要するに、內國産業の振興を目的とする輸入制限も、貿易差額を目的とする輸入防遏も、輸出獎勵の爲めにする戻税も補助金も特惠條約も植民地獨占も、何れも總て、眞の國富を増進する所以でないと言ふにある。

成程博士の指摘せらるゝ様に、スミスは、『Mercantile system に於て、消費者の利益が殆んど常に生産者の利益の爲めに犠牲に供せられて居る』<sup>53)</sup>ことを主張する。併し乍ら之を以つてスミスが商人若くは資本家の利己的活動を攻撃するものであると做すことは、少しく早計に過ぐるの嫌なきか？ 後に述ぶるが如く、スミスが個人の利己的活動を是認する所以は、それが『見えざる手』<sup>54)</sup>

50) ibid., p. 416.  
51) ibid., p. 417.  
52) ibid., p. 417.  
53) ibid., Vol. II, p. 159.  
54) ibid., Vol. I, p. 421.

に導かれて『自然的若くは寧ろ必然的』<sup>55)</sup>に社會の公益を増進すると認めるからである。此の根本思想から見て、彼れが Mercantile system の下に於ける商人の利己的活動を否認すべき謂れはない。『余は、かの公益のため事業を營むと稱する人々によつて多くの善事の爲されたことを會て聞かない。商人の中には、斯様のことを標榜しつゝある者も稀でないけれども、言ふまでもなく之は無用の沙汰である。』<sup>56)</sup>これがスミスの言ふ所である。私の見る所では、スミスの重商主義に對する攻撃の要點は、彼等個人の利己的精神にあるのではなくて、彼等の國家若くは政府が採る所の保護干渉制度にある。國家が獎勵若くは制限を設けて私人の企業を左右するが如きは、『立法者の出過ぎたおせっかいであり、』<sup>57)</sup>それは『明らかに壓迫であると共に潜越である』<sup>58)</sup>と主張する點にある。此の主張の下に彼れは mercantile system を攻撃し、更に Agricultural system を攻撃し、さうして最後に到達した結論は、『獎勵若くは制限の總ての制度が此の如く完全に取り去られてしまふと、自然的自由といふ簡單明瞭な制度が 自ら成立する。あらゆる人間は、正義の法則を犯さざる限り、彼れ自身の利益を自ら追及すべく、完全に自由に放任せられ、……元首は、人間の知慧や知識を以つては適當に遂行することの出来ない所の任務——私人の産業を管理し、若くは其を導いて社會の利益により最も適當な事業に向けしむるといふ任務——から完全に責任を免かれる』<sup>59)</sup>所の、所謂自由放任政策にあつた。

此の如くスミスの mercantile system に對する攻撃の要點が、彼等の採る所の保護干渉政策にあつたとすれば、彼れが mercantile system を攻撃した事實は、博士の謂はるゝ様に彼れが厚生

55) ibid., Vol. I, p. 419.

56) ibid., p. 421.

57) ibid., p. 123.

58) ibid., p. 123.

59) ibid., Vol. II, p. 184.



哲學の主張者であることを根據づけるよりは、寧ろ却つて、彼れが自由放任論者として資本主義經濟學者の一特徴を具へてゐたことの裏書となるものではなからうか？

#### 四

博士がスミスは資本主義經濟學者でなくて、厚生哲學の闘士であると主張する、第四の論據と見るべきは、スミスが『消費は生産の唯一の目的である』<sup>60)</sup>ことを主張し、従つて今日の『資本的價格經濟のやりかたは、アダム・スミスに於ては全然否認せられて居る』<sup>61)</sup>といふ點にある。今若し彼れが、價格經濟を『全然否認』して、之に代ふるに必要經濟を以つてすべきことを論じたのが事實とすれば、博士の説は實にスミスに關する驚くべき發見であつて、スミスは明かに社會主義經濟學者の部類に入るべきものとなるのであるが、私は此の點に就ても亦、博士の教を乞ふべき多くのものを有つ。

第一に博士が指摘する所の、Consumption is the sole end and purpose of all production<sup>62)</sup>といふスミスの文句は、如何なる内容を意味するか、之を以つて博士の斷ぜらるゝ様に、資本的價格經濟を否認したと認めることが出来るかどうか？ 思ふに此の文句は必ずしも、個々の生産者が消費を直接の目的とすべきを言ふものでないことは、分業の發達を最も重大視したスミスの見解から極めて明瞭であらう。私の見る所によれば、sole end and purpose は個々の生産者の目的を指すものでなく、國家の立法上又は政策上の目的を指すもの、様である。何となれば、彼は直ちに右の文句に續いて『生産者の利益は、唯其れが消費者の利益を増進するために必要である限りに

60) 商學研究、前掲號、四二〇頁。

61) 同上、四二〇頁。

62) Wealth of Nations, Vol. II, p. 159.

於てのみ、(政府から)留意するべし (ought to be attended to) ものである』<sup>63)</sup>といひ、尙は續いて、消費者を損して生産者を利用するものとして輸入制限及び輸出獎勵を攻撃して居るからである。他面に於て、既に述ぶるが如くスミスは個人の利己的活動を是認し、又之を是認することが社會にとつて最も有利であると做すものであるから、個々の生産者の唯一の目的は、彼れに従へば自利以外にあるべき筈はない。従つて『消費は生産の唯一の目的である』といふ文句は、必ずしも自利が總ての生産者の唯一の目的であるといふ文句と矛盾するものでない。否、兩者の間に何等の矛盾も存しないと認める所に、スミス經濟學の根本的特徴が横たはる様に思はるる。

而してスミスが否認したと博士の謂はる、『資本的價格經濟』の意味が、今日普通に謂はる、價格經濟を意味するものならば、それは生産の側から見れば、個々の生産者の生産を爲す動機が、一に其の生産物を賣ることによりて得らるゝ利潤にあることを意味するに外ならぬ。従つて個々の生産者の目的は、生産物その物になくて利潤を引出すべき生産物の價格にある。他の言葉を以つて言へば、生産が交換の爲めに行はるゝ經濟組織に外ならぬ。此の場合に於ける生産の目的とは、個々の生産者の個人的目的を意味するものであるから、價格經濟を『全然否定』するためには、個々の生産者の營利的活動を否定せねばならぬ。然るにスミスが『消費は生産の唯一の目的である』と謂へる場合の生産とは、茲に考證するが如く、生産に對する國家の態度を示すものであつて、必ずしも個々の生産者の營利的活動を否定するものでない。従つてスミスの右の文句を以つて、今日の價格經濟を否定するものであると做す博士の説に對し、私は十分に承服し能はざ

るものである。

偕て、福田博士の指摘せらるゝ如く、今日の經濟組織は『價格の世界』<sup>64)</sup>であり、『價格所得の世界』<sup>65)</sup>である。『併し乍ら此の意味に於ての價格所得を餘計得るといふ事が、果して本當の人間の幸福を進めるのか、本當に Welfare を進めて居るのか』<sup>66)</sup>といふ點に至つては、大きな疑問であつて、私は此點に於て博士の悲觀說に全く共鳴するものである。けれども茲に注意を要するは、社會組織としての價格經濟に對する非難と、科學としての價格經濟學に對する非難とを混同してはならぬといふことである。最近價格經濟組織に對する反感の高まつて來るに従つて、價格經濟學までも之が爲めに禍せられる様に見えるのは、私の遺憾に思ふ所である。生産が交換の爲めに行はれ、分配が交換によつて行はるゝ今日の經濟組織をば、一個の sein として取扱ひ、之に向つて科學的研究を進めんとする今日の經濟學は、それが sollen を取扱ふ哲學にあらざる限り、又それが schicklichkeit を取扱ふ政策にあらざる限り、價值若くは價格の生産分配を除外する能はざるは當然であらう。研究の對象が價格經濟組織である以上、價格經濟學が科學として生れるに何の不思議もない。さればこそ其の研究の對象をば『一般的意義に於ける生産』<sup>67)</sup>から限定して、『近代の資本家的生産』<sup>68)</sup>に限る以上、マルクスの大著『資本』も資本的剩餘、價值の研究に外ならなかつた。<sup>69)</sup>『今日の價格經濟學は行詰つて居る』<sup>70)</sup>と言ひ得るならば、それは價格經濟學ではなくて、價格經濟組織の行詰りに相違ない。

言ふ迄もなくスミスの『研究』は『諸國民の富の性質及び諸原因』に關するもので、それは既に

64) 商學研究、前掲號、四一九頁。

65) 同上、四一九頁。

66) 同上、四一九頁。

67) Marx, Einleitung zu einer Kritik der Politischen Ökonomie.

68) Marx, ibid.

69) 何上博士著、社會問題研究、第四十五冊、二頁(通冊一五八二頁)。

70) 商學研究、前掲號、四一八頁。

述ぶるが如く、生産組織の歴史的一形態と其の一般的形態とを混同したものはあるが、併し其の研究の對象は、大體に於て今日の資本主義經濟組織に外ならぬ。既に彼れの研究の對象が價格經濟組織であればあるだけ、また之に對する彼れの觀察が徹底すればするだけ、それだけ富に關する理論的研究は價值乃至價格を除外することは出来なかつた筈である。彼れは人間の生活に必要な物質の社會的生產をば、分業といふ方面から觀察したのであるが、分業とは『彼れ自身をして全く一つの仕事にのみ没頭せしむる』<sup>71)</sup>ことであり、從つて『各人は交換によつて生活する』<sup>72)</sup>ことを意味する。又資本家が勞働者を傭入れ生産手段を購入して生産を營むのは、『彼れの生産物を賣却することによつて、即ち勞働者が原料の價值に附加する所のものに依つて、利潤を得んが爲めであり……彼等の生産物を賣却することによつて、其の資本を回收するに足るものより以上に何物かを期待するでなければ、資本家は其の資本を用ふことに就き何等の興味をも有し得ない』<sup>73)</sup>といふことは、彼れの明らかに認むる所である。換言せば、資本主義經濟組織の下に於て、生産が交換の爲めに行はれ分配が交換に依つて行はるゝことは、既に早くスミスの『鋭敏な頭』<sup>74)</sup>に映じて居た。さうして彼れの考ふる所に依れば、是等の『交換をなすに當つて、人々が自然に守る所の法則が……財の交換價值を決定する』<sup>75)</sup>のであつて、此の理由に依つて、彼れの『研究』は、第一卷十一章の中その中心をなす四章を割いて、貨幣及び價格の研究に捧げて居る。かくの如くしてスミスにあつては、富と價值若くは價格とは離るべからざる關係にある。固より富と價值とは同一でなく、<sup>76)</sup>富は人間に向つて幸福を齎らす外物であり、價值は是等の外物の總てに共通

71) Wealth of Nations, Vol. I, p. 19.

72) ibid., p. 24.

73) ibid., p. 50.

74) Cannan, Lectures of Adam Smith, editor's introduction, p. xxix.

75) Wealth of Nations, Vol. I, p. 30.

76) Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, (Gouner's ed., p. 258).

なる一屬性である。富と價值との同じからざることを、猶ほ山と山の高さの異なるが如きものか。尤も山なくして山の高さなきが如く、富なくして價值はあり得ない。『如何なる物も、使用價值たることなくして、價值たることはあり得ない』<sup>77)</sup>のであるが、併し富によりて得らるゝ人間の幸福の程度は、價值の大きさに依存するものではなくて、直接に富の大きさ——容積重量若くは個數——に依存する様に見える。然らば富の大きさと價值の大きさは、無關係なものであり得やうか？

『同じ時、同じ處に於ては、總ての商品の實價價格と名目價格とは、互に正確に比例する』<sup>78)</sup>とスミスも言ふ通り、同一の時處位に關する限り、富の大きさと價值の大きさは正確に比例する。従つてスミスは到る所に於て、國民の年々の生産物と其の價值若くは價格とを同視する。例へば『あらゆる社會の勞働に依つて年々に蒐集され生産さるゝ物の全體、若くは同じことに歸する所の (what comes to the same thing) 其の全價格は云々』<sup>79)</sup>といひ、又『資本のあらゆる増加又は減少は、勞働の眞の分量即ち生産的な働き手をは、自然に増加又は減少し、従つて其の結果として、其國の土地及び勞働の年々の生産物の交換價值、其國の總ての住民の眞の富及び收入をは、増加又は減少するに役立つ』<sup>80)</sup>とも言つてゐる。是に由りて見れば、彼れは少くとも富の大きさと價值の大きさが互に比例するものなることを認めてゐる。さうして享樂遞減の法則を姑く度外に措くならば、富の大きさがものが直接に人間の幸福に比例するのであるから、同一の時處位に關する限り、人間の幸福の程度は價值の大きさに比例すると見ることは誤りではなからう。

私は博士と共に、スミスの胸中に *Welfare* の觀念の往來して居たことを認むるに吝でない。殊

77) Marx, Das Kapital, Erster Band (S. 7).

78) Wealth of Nations, Vol. I, p. 39.

79) ibid., p. 54.

80) ibid., Vol. I, p. 320.

に彼れの經濟政策の原理が、國民の幸福にあつたことは疑ふべくもない。併し乍ら、其の故を以つて彼れを厚生哲學の闘士であると言ひ得るならば、凡そ政策を論ずる學者の大多數は、比々皆然らざるはなからう。殊にかのマルクスの如き、其の慘憺なる生涯を通じて、人類の幸福のために奮闘したものは、正に厚生哲學の第一人者に推されねばならぬであらう。私の見る所に依れば、彼等の議論の岐るゝ所は、謂ふ所の幸福を將來するに當つて、如何なる原則と手段を主張するか點にあると思ふ。金銀の蓄積を唯一の目的とした mercantilist であらへ、人間の幸福がそれに依つて得られると考へたればこそ、あらゆる獎勵と制限に力を用ひたものであらう。Mercantilist がスミスと區別せられ、スミスがマルクスと區別せらるゝ要點は、彼等が人間の幸福を思念したか否かにあるのでなくて、人間の幸福を將來すべき手段を何れに求めたかに存する。保護干渉政策による金銀の蓄積に依つて人間の幸福を祈念した所に Mercantilist があり、自由放任政策によりて國民の幸福を求めた所にスミスがあり、資本の公有と生産の公營に依つてのみ廣く人類の幸福を將來し得ると信じた所にマルクスの特徴がある。私は斯様に考ふるものである。